

世界史と國民史滯歐所感の一節

竹岡, 勝也

<https://doi.org/10.15017/2344395>

出版情報 : 史淵. 13, pp. 191-194, 1936-07-20. 九州帝国大学法文学部
バージョン :
権利関係 :



世界史と國民史

滯歐所感の一節

竹岡勝也

史學の目的が單に歴史事實の考證決定に終始するものでない事は改めて云ふ迄もない。個々の歴史事象は全體との關係に於て始めて史學研究の視野に取り入れられる。換言すれば、個々の歴史事象は全體を構成する部分としての意義を明瞭にする時に、始めて史學研究の對象としての價值を提供する。問題を把握すると云ふ事は、要するにその歴史事象が持つ處の歴史的價值を認識する事を意味するものに他ならない。價值の認識を伴はない問題の把握は、如何に精緻な考證が是に就て行はれ、又時にたま／＼、その結果が如何に有意義に使用される場合があるにしても、歴史家としての自覺に立脚しない仕事である事に於て、それは學問以下の評價を

免れる事が出来ないであらう。兎に角それが史學の對象となる場合に於て、個々の歴史事象は已に個々の歴史事象としての制約を脱して、活潑に全體に働きかける作用を開始する。個々の歴史事象が持つ處の歴史的意義なるものは茲に成立するのであるが、この事は又次の關係を豫想せしめるものであるとも云はれるであらう。即ち史學の目的は、個々の歴史事象を個々の歴史事象として研究する事にあるのではなくして個々の歴史事象を全體の組織の中に送り届ける事、換言すれば、かくして組織された歴史世界全體の認識に迄導かれるものでなければならぬ。そしてこの歴史世界なるものが、觀念の世界ではなくして經驗の世界である事に於て、茲

に世界史の組織が問題となつて來る事もまた極めて當然である。世界史の構成は如何に決定せらるべきかの問題は暫く別として、兎に角一切の史學の研究が、何等かの意味に於て世界史の組織を豫想すべきものである事は承認されなければならぬであらう。かくして組織された多くの世界史が我々の前に提供されて居る事もまた事實である。併しながら已に提供されて居る是等の多くの試みは、一面何を我々に語つて呉れるか。擴大された意味の歴史の概念に従つて之を見るならば、此處に於ては尙無盡藏とも云はれる處の多くの問題に遭遇しなければならぬであらう。例へば世界史は往々にして大勢の移動、文化の主潮を骨子として組織せられ理解される。従つてこの大勢の移動に、又文化の主潮に關連する事に依つて歴史事象の價值は決定せられ、その採擇が行はなければならない。エヂプトや東方の文化は、ギリシヤの文化を養つて呉れた事に於て世界史的意義を明かにし、中世のヨーロッパは、ギリシヤローマの文化が頽廢した意味に於て暗黒時代と呼ばれる場合も

あり得たのである。そして中世伊太利の文化も中世獨逸の文化も、基督教文化として、基督教的文化圈の問題に總括せられ、かくして世界史の組織は導かれて來る。併しながらかくして組織された世界史の理解は一面何を意味するであらうか。例を我國の場合に取つて見るならば、浮世繪は比較的廣く西人に理解せられ、又近世西洋の繪畫に或る程度の影響を與へた事に於て世界史的意義を有し、中世の茶道文化の如きは是に反する故を以て世界史的意義を持つ事が困難であるとされなければならない。又我國上代の佛教文化は、要するに佛教文化圈の問題に於て、支那や印度の佛教文化と同質のものとして取扱はれる結果を生じて來る場合もあり得るであらう。かくして個々の歴史事象は、次第にその具體性を失ひ、同質の要素が抽象せられ、結合せられ、綜合せられる事に依つて世界史の組織の中に織り込まれて行く。併しながらかくの如き態度に依つて組織せられ理解された世界史なるものは、果して嘗つて一切の歴史事象に價值を與へるものとした歴史世界全體の概念と一

致し得るものであるか。大勢の移動に關與せざる多くの歴史事象、世界文化の主潮に關與せざる多くの文化現象が悉く振り落され、しかもその文化の理解に於て、同質の要素が強調せられ異質の要素が閑却せられ、具體的なものから抽象的なものに變質せられ、かくして組織された世界史なるものを、歴史世界全體として理解する場合には、往々にして歴史の理解を淺薄ならしめ、文化の意味を見失はしめる識りある事を免れ得ないであらう。そしてかくの如き史學の缺陷を補充するものとして、茲に國民史の立場が考へられる。國民史は時には民族史の性質を伴ふ場合もあるであらう。兎に角同一生活圈に屬する一つの民族、一つの國民の歴史が研究の對象とされる。そして如何にその國民が歴史發展の過程に於て、他國民と交渉し、他民族の文化の影響を蒙る事あつたにしても、その交渉、その影響は、常にその國民自らの立場から理解せられ取扱はれる。この意味に於て國民史は又自ら歴史世界全體を持つ處の獨立した立場に置かれるとも云はれるのである。そして國民史が

自ら此の歴史世界全體を持つ事に依つて、嘗つて世界史的立場から閑却された茶道文化の如き此處に於ては極めて重大な意義を示して來ると云ふ場合があり、又上代の佛教文化の如き、必ずしも世界的同質の故にではなくして、我國の文化に働きかけたその作用に於て、或はその作用に基く國民精神の發達として、特殊の意味に理解せられ、支那印度に於ける場合とは嚴密に區別せらるべき性質を明かにして來る。暗黒時代と稱せられるゲルマン中世の基督教美術の如き、此處に於ては我が飛鳥時代の佛教美術にも比せらるべき重大な意義を示して來る事もあり得るのである。この國民史と雖、更にその内部に立ち入つて見るならば、其處には世界史とその缺陷を共にする場合がないとは限らないであらう。そして此處には史學そのものに對する重大な問題が提出されて居るとも云はれるのであるが、兎に角この國民史の獨立を承認する事に依つて、歴史に對する新なる理解が導かれ、引いて世界史の認識が深められると云ふ場合が少くないのである。この意味に於て國民史的立場

は必ずしも世界史的立場を否定するものではない。國民史的歴史世界全體は、世界史的歴史世界全體を豫想する事を妨げるものではないが、この場合に豫想される世界史なるものゝ構成は必ずしも今日與へられる世界史と同一のものとはならないであらう。歴史及び文化に對する國民史的理解が一層尊重せられ、更に多くの歴史事象、更に多くの文化現象に對して價值を與へ

得るものでなければならぬであらう。

附記

諸國の博物館や美術館を廻る間に自分の頭に去來した一つの考への覺書である。自分は今更にこの問題を東洋の學の概念に依つて照らして見る事に關心を持つて居る。併しそれは學全般に亘る問題となつて來るが故に他日の機會に譲る事にした。